

# ドレッサージュホースに育てよう!



8月7・8日と《全日本馬場馬術大会 Part II》のLクラスにオースミイレブンと参加しました。初日の予選(L1)は2位、決勝(L2)も2位という結果でした。この大会については次号で詳しく報告します。

今月は7月号に続いて、コンタクトの安定について考えてみたいと思います。

## ☞ コンタクトの安定 パートII ☜

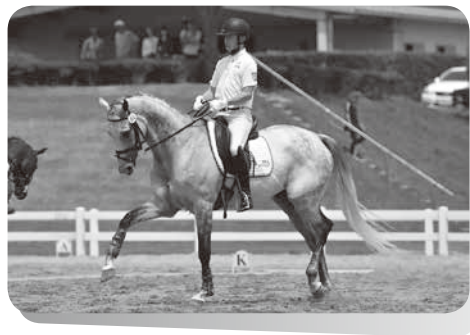
私がオースミイレブンに騎乗して調教を始めて半年間が過ぎ、少しずつ変化が出てきたように感じています。その一つに駈歩でのバランスとコンタクトが改善してきたことがあります。駈歩は、以前このコラムでも取り上げたアップヒルへのバランス改善と共に、ハミへ突き出してくる抵抗も少なくなり、馬体全体が収縮していきことができるようになってきました。今後は、安定的に駈歩のアップヒルバランスを維持していけるようになりたいと思います。

今回は、《コンタクトの安定 パートII》です。オースミイレブンの場合は、私が騎乗する以前にきちんと調教されていたこともあり、前回紹介した方法でほとんど譲りができています。やはりコンタクトは、正しいハミ受けから得られるもので、そのハミ受けは、馬の協力があってからこそ確立するものと改めて感じます。騎手が一方的に強制しても馬は受け入れられないでしょう。一部の馬は我慢して受け入れるかもしれませんが、それでは全ての馬には対応できません。

中にはどうしてもハミへの抵抗がなくなる馬も出てきます。このようなケースは、調教を誤った場合にも起こり得ます。私は、こうしたこじれてしまった馬の心を解きほぐすために、折り返し手綱を初めとする補助具は一切使いません。こうした補助具は、私たちが持っている力よりもより強力に馬に働き掛ける場合があります。もちろん、だからこそこの道具なのですが、これらの補助具は本来《きっかけ》として使用するもので、強く作用させたまま恒常的に使用するものではないからです。そうして誤った補助具の使用によって馬たちは身体を硬くし、心を閉ざしてしまうこともあります。このようになってしまった場合に更に強く作用する調教補助具によって制圧しようとするれば、折り返しのつかないことにもなり兼ねません。

そのため私は、馬の口とダイレクトに繋がっている自分の拳から受ける感覚で、馬を納得させて《譲り》を得たいと思っています。人が使える範囲内の力でなんとかしなければ解決とは言えません。強くハミに抵抗を示し《譲り》が得られない馬について、その対処方法と感覚を私なりに解説したいと思います。

ハミ抵抗をなくして《譲り》を得る私なりの方法は、基本的に前回紹介した方法を用いて行うものです。その中から我々がどのような感覚で馬の気持ちを解きほぐすかが問題です。多くのケースで、騎手がハミにプレッシャーを掛けた瞬間から、それに反発して力むか頭を上げて逃れようとします。このような場合の力の入れ加減とタイミング、感覚を確認してみます。



ハミ受けは、馬が顎を譲ってその体勢にとどまろうと自分で選択しなければ成り立ちません。馬にその位置を選択させるためのきっかけを作ります。

1. 反抗してハミに突き出してきた場合、騎手は先ず騎座を安定させ脇を締め拳を控えてハミへプレッシャーを与えます。
2. 両拳とも同じ強さではなく、内方(側方)への屈曲を加えながら譲りを試みます。
3. 恐らく問題がある馬は、この時点でハミに譲ることがないでしょう。その場合、ハミへのプレッシャーを一旦緩めます。馬が譲らなければこちらの拳も譲らないという強い意志が必要なケースももちろんありますが、いつまでも馬と張り合うことが良いとは限りません。
4. この場合、サイドに屈曲させながら馬の力みを逃がし、ハミへのプレッシャーをじっくり掛けた後に、馬がこちらのある程度強いプレッシャーに対して譲ってこなければ、それ以上強く使うのではなく、こちらプレッシャーを緩めます。これを馬の抵抗に負けてしまっているという人がいるかもしれません。しかし、ここで馬と力と力と対抗し合うから馬が強くなるのです。力で馬と勝とうとしても無駄です。そのため、一旦ハミへのプレッシャーを解放してみます。
5. そして、一旦緩めた後、新たにプレッシャーを掛け直します。同じようにサイドに屈曲させながら、外方手綱も控えながら

内方手綱を開くようにして馬の頭頸を横へずしながらプレッシャーを掛けてみます。再び馬がハミに対して抵抗したままでも譲ります。この時たいていの馬は、人間のプレッシャーに抵抗しようとしています、それを肩透かしさせるようにします。こうすると馬は、力むのではなく逆に力が抜けるようになることが多いです。

プレッシャーを緩める ⇒ 馬の力みが緩む ⇒ もう一度プレッシャーを掛ける ⇒ プレッシャーを緩める

というサイクルを繰り返します。

また、プレッシャーを掛ける時間は馬の反応と相談しながらになりますが、あまりに小刻みにするのではなく、馬がこのプレッシャーに対して「どのように反応しようか？」とある程度考える時間を与えるべきです。

拳は固定するのではなく、柔軟に馬の口に対して生きた反応をしていくべきです。それは、ただ拳を無秩序に動かすという意味ではなく、常に馬の反応と共に拳の動きに強弱つけるということです。そうして、馬が自分でハミを受けた体勢を選択すれば、自らそこに留まろうとします。そのきっかけをどのように与えるか、だと思います。如何に馬にとって不快でなく、快適に安心感を持ってリラックスして受け入れるかに掛かってきます。

騎手は、馬ができない場合は、馬が迷っていると思うべきです。その迷いを強引に型に当てはめようとするべきではありません。馬に「気付いたらここにいたんだ」と思わせることが安定する秘訣です。上述した拳の使い方でも馬を自然にそのポジションに誘導します。調教補助具に頼らない騎手の感覚を研ぎ澄ましていくことが、馬に対する真摯な向き合い方だと思っています。

そして、ハミ受けから得られるコンタクトを最も正しく感じるために必要なことは、馬の《バランス》です。馬が自身の頭と頸の重さを肩に乗せて、騎手の拳にもたれていない状態で初めてコンタクトが成立します。

次回以降に、コンタクトを得るには欠かせないこの《バランス》についても考えたいと思います。